西オーストラリア。日本からのダイビングのディスティネーションとしては
いまいちメジャーになりきれない感のある海だが
実は他の海ではなかなか経験することのできない面白いダイビングが待っている。
広大な西海岸を縦断すればそれぞれのポイントで見れる生物が明確に違ってくるのが面白い。
今回は、そんな西オーストラリア特集第1弾として西オーストラリアの玄関口パースのアシカスイム
世にも奇妙で美しい生物、リーフィーシードラゴンに会えるエスペランス
そして、ジュゴンが1万頭以上生息していて世界自然遺産にも登録されている、シャークベイ
そのジュゴンにスポットを当てて、紹介しよう。

西オーストラリア特集Vol.1

WILD WEST

#01 Perth

#02 Esperanse

#03 Shark Bay

Photo&Text **Takaji Ochi**
Special thanks **WATDC** (**West Australia Travel & Dive Centre**)

Information Link click! 情報HPへジャンプ
http://diveadventures.watravelanddive.com/

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

#01 パース・都会のアシカ Perth

人なつっこいオーストラリアアシカは水中でも、目の前で楽しいパフォーマンスを披露してくれる

Information Link click! 情報HPへジャンプ
http://diveadventures.watravelanddive.com/

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

ダイバーのフードが欲しくて、あま噛みして一生懸命引っ張る姿が滑稽だ

フィンをくわえて、顔を激しく左右に振る姿は、犬そのもの（写真上）
パースから程近いリトルアイランドのビーチには、アシカたちがたむろしている（写真左）

フィンに興味を示して、ダイバーの突き出したフィンをじっと覗き込む若いアシカ（写真上）
ビーチに寝転ぶアシカは、接近できる個体もいれば、近付くのを嫌がる個体もいる（写真左）

フレンドリーアシカたちのコロニー

西オーストラリアの州都であり、玄関口でもあるパース。美しいスワンリバーの湖畔に開けたオーストラリア西海岸唯一の大都市だ。風光明美で治安もよく、仕事をリタイアしてから住んでみたくなるよな環境で、自分自身、いつかは住んでみたい町ベスト3の中に常に入っている。

パース近海で僕個人的に一番お勧めなのが、オーストラリアシーライオン（アシカ）のコロニーがあるカナック島やリトルアイランドでの、彼らとのスノーケルでの交流だ。この海域には、若いオスたちのコロニーしかないため、メスや子供たちを守るハーレムのオスが威嚇しにくることも無く、皆いたって気ままにダイバーたちと遊んでくれる。世界中の他の海のアシカたちに比べても、若いオスの体毛が白っぽくて、撮影でも表情を撮りやすい。僕がパースに来て、ダイブコーディネーターの高島さんに真っ先にリクエストするのが、このアシカたちに会いに行くことだ。

このアシカたち、ほとんどの個体が島のビーチで寝そべっているのだが、海側から誘うように近付くと「わ～い、あそぼ！」と言う感じで海に駆け込んで来る若いアシカも多い。時間帯によっては、アシカたちの方からボートに近付いて来て「あそぼ、あそぼ」と誘いをかけて来る事も。もちろん、ビーチで寝そべっているアシカも、のんびりしていてかわいいんだけど。水中では、フィンをあま噛みして、上目遣いでこちらを見つめて、「これちょうだい、ちょうだい、ちょうだい、ちょうだい～！」と首を左右に激しく振ってフィンを脱がせようとする奴もいる。こちらが渡す気がないと分かると「ち、いいよ、他の人にもらうから～」といった感じでぷいって泳ぎさり、またすぐに別のターゲットを見つけてフィンにあま噛みしてるのだ。

取材で潜った時、知り合いのシンガポール人カメラマンが寒いからとフードをかぶっていたら、一頭のアシカが、フードが欲しくて必死になって引っ張っている光景がおかしかった。引っ張られる方も何がおこったのか分からず、しばらくは引っ張られ続けていて、まるで鬼多郎に出てくるねずみ小僧みたいになっていたのを見た時は思わず吹き出してしまった。

また、今年（2005年）の年末頃、パースを訪れる予定だが、今回もこのアシカたちと一緒に遊ぶのを一番楽しみにしている。

#01 **Perth**
パース・都会のアシカ

Information Link click! 情報HPへジャンプ
http://diveadventures.watravelanddive.com/

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

複雑なケーブやスイムスルーが多いのが、ロットネス島周辺海域のダイビングスポットの特徴だ

ロッキンハムのドルフィンスイミングは、日本からの観光客にも人気が高い（写真上）

日本人には馴染みの無い姿をした、ハコフグの仲間、ホワイトバレッド・ボックスフィッシュのオス（右）とショウズカウフィッシュのメス（左）は、パースでは定番の魚

パース近郊には、このような美しいビーチが点在する。（コテスロビーチ）

西オーストラリア最大の都市でのダイビング

このパース近海のダイビングスポットと言えば、パースの海の玄関口となっているフリーマントルの町の沖合にあるレジャーアイランド、ロットネス島を中心に点在している。大陸棚の上に位置しているため、水深はそれほど深くないフラットな海底が続く。ドロップオフなどは無いのだが、縦横無尽、複雑に入り組んだケーブが点在し、冒険気分を満喫させてくれる。

日本や、熱帯の見慣れた魚たちとは微妙に異なる、南半球ならではの固有種の魚たちが多く生息していて、僕たちの目を楽しませてくれる。

また、近郊のロッキンハムでは、ビーチエントリーポイントで、ボックスフィッシュと呼ばれている、これまた変わったハコフグの仲間たちを多く見ることができるし、この湾内に生息しているバンドウイルカたちとのデイトリップ・スイミングツアーは有名だ。

さて、パース近海の特集は次回に大々的に紹介することにして、今回は、西オーストラリアでも特に注目して欲しい、二つのディスティネーションをピックアップして紹介したい。一つは、奇妙な姿をしたリーフィーシードラゴンに会えるエスペランス、もう一つは、世界自然遺産にも登録され、ジュゴンが1万頭以上生息していると言われているシャークベイ。どちらも、おそらく今まで多くの日本人ダイバーが潜ってきたのとはまったく景観や生物層の違う不可思議な海だ。

ゼブラフィッシュの群れ。この魚も日本人には馴染みが薄く海中では目立つ存在

海藻の上を泳ぐ、コモンブルズアイ

Information Link click! 情報HPへジャンプ
http://diveadventures.watravelanddive.com/

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

#02

Esperance

エスペランス・竜の住む海

天空から舞い降りたドラゴンのようにその姿を現した、リーフィーシードラゴン

Information Link click! 情報HPへジャンプ
http://diveadventures.watravelanddive.com/

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

こんな姿をした生物が存在している事自体、不思議な感じがする

ダイバーと比較すれば、
その大きさもわかってもらえるだろう

「竜の住む海」エスペランス

パースから南東に約720km移動したオーストラリア南岸に位置するエスペランスは、南極海に面した小さな港町。この海で注目される生物と言えば、何と言ってもリーフィーシードラゴンだ。数ある海中生物の中でも、その異様な姿は突出している。様相だけでなく、初めて遭遇した時には、最大45cm以上にもなるサイズの大きさにも圧倒された。

透明度の高い海藻の海の中、侵入者であるダイバーに遭遇しても逃げる様子も無く悠然と泳いでいた。海藻に擬態している自分の姿によほど自信があるのだろうか。確かに、最初はそのサイズにも関わらず、海藻のエリアがあまりに広すぎて、ガイドが探してくれないかぎり、自分で探し出すのは不可能ではないかと思っていた。しかし、ヨウジウオの一種なだけあって、その泳ぎはスローモーで、一度見つけてしまえば、こちらが観察や撮影に満足するまで、よっぽどの事が無い限り見失う事はほとんどなかった。要するに、別に逃げたくなかった訳ではなく、単純に泳ぎが鈍かっただけの事なのだ。

僕がこのリーフィーを初めて目撃したのは、エスペランスからダイビングボートで約１時間のラップウイング・ロングアイランド。水温は夏場で約20度。透明度30mはある清涼感のある海藻の海中。まるで草原のような景観の中で優雅に泳ぐ様を見ながら、「ミヒャエル・エンデの『ネバーエンディングストーリー』に登場する白竜ファルコンってこんな感じかな」と空想を膨らませていた。そして、リーフィーだけでなく、この海中に生息する多くの生物を、この物語に登場する不可思議な生き物とオーバーラップさせることで、ダイビングを楽しんでいたのだ。

Information Link click! 情報HPへジャンプ
http://diveadventures.watravelanddive.com/

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

無気味な姿をしたゴブリンフィッシュにはリーフィー以上の衝撃を受けた

妖精たちが続々登場

エスペランスで見られる目玉の生物が、このリーフィーシードラゴンだけだと思ったら大間違いだ。確かに自分も最初にこの海を訪れるまで、ここにはリーフィーシードラゴン、それに同じ仲間のウィーディーシードラゴン(コモンシードラゴン)くらいしか、めぼしい生物はいないものだと思っていた。

ウィーディーは、オーストラリアでの生息エリアもリーフィーより広範囲で、個体数も多いようだ。南オーストラリア州のカンガルー島から、西オーストラリア州のパース近海までにしか生息しないリーフィーに比べて、ウィーディーはタスマニアやニューサウスウエールズ州にまで生息範囲を持つ。異様さだけでなく、珍しさの点からもリーフィーに軍配が上がる。しかし、初めてウィーディーに遭遇した時の感動と衝撃は、決してテンションの低いものでは無いはずだ。しかも、エスペランスから車で約1時間、ケープルグラン国立公園の中にあるラッキーベイというビーチエントリーのポイントでは、リーフィー5匹、ウィーディー15匹という信じられないほどの数を何とたった1ダイブで見れたこともあった。

もちろん、この2種が見られただけでも大満足ではあるのだが、不可思議な様相をした生物たちはそれだけに留まらなかった。ガイドが海藻と岩の間から見つけだしたのは、自分が見た中では一番馴染みの薄い異様な姿をしたカサゴの仲間、その名もゴブリンフィッシュ。ゴブリンとは妖精の中でも、醜い姿をした、どちらかと言えば妖怪系の空想上の生き物をあらわす。まさにその名前にぴったりのこの魚、実際にはリーフィーやウィーディーよりも個体数も少なく、見つけづらい。餌をついばむ事を禁じられ、クチバシを奪われたワシのような顔には、異様なまでに目立つ巨大な目が、我々に見つかってしまった事を恐れるかのように見開かれている。首にあたる部分は見事に鳥類やほ乳類の頭部があるかのようにくびれ、胸びれは、飛ぶ事を禁じられたワシの翼のように見える。動きが鈍いように見えるのだが、一瞬の瞬発力はあるようだ。しかし、遠くまで泳ぎ去る事はなかなか難しいらしい。もし、この生物と遭遇したら、実はリーフィーやウィーディーよりもラッキーだと思って間違いない。

ウォーティープロウンフィッシュも珍しさ、奇妙さではゴブリンフィッシュに引けを取らない。この魚もやはり底性の生物で、海藻と岩の間に隠れるように生息している。僕は一度の訪問で、この2種を両方見させてもらったという本当にラッキーな経験をした。

この他にも、ロングスノーテッドボアフィッシュなんかもかなり奇妙な様相だし、パース近海ではペアでしか見れなかったオールドワイフが群れていたり、。ダイビング中にアシカが姿を見せて、ダイバーの周りを興味深げに泳ぎ回ったりしてくれる。水温の低さだけを除けば、個人的には、リピートしたい海のベスト5には入る面白い海だった。

#02 エスペランス・竜の住む海 Esperance

エスペランスの町にあるジェティーに群れるオールドワイフの群れ

卵を抱えたオスのウィーディーシードラゴンも人気の生物だ

これも奇妙な姿のウォーティープロウンフィッシュ(上)ツッパリのような背びれがかっこいい、グリーンケイル(下)

Information Link click! 情報HPへジャンプ
http://diveadventures.watravelanddive.com/

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

ビーチの白さは世界一？

ケイ素でできた白砂のビーチ。塩や砂糖の容器に入れても多分分からずに使ってしまいそうだ

「こんな美しい白砂のビーチは今まで見た事がない」初めてエスペランスを訪れた時に、僕を感動させたのはリーフィーなどの変わった生物ではなくて、海岸線の景観の美しさだった。海は、南極海に面し、荒涼とした印象を持つかもしれない。ところが、今まで様々な暖かい熱帯の美しい海を訪れているのだが、このエスペランスの白砂以上に美しい場所には未だに巡り会っていない。

ここの砂はケイ素で形成されていて、粒子が非常に細かい。靴で踏みしめると、「キュッ、キュッ」と音がする鳴き砂でもある。そんな砂なので、車で走ると、まるで上質の舗装道路の上を走っているような滑らかで快適な走行ができる。この白砂の海岸線は、はてしなくどこまでも続いているのではと思えるくらい長い。おまけに、もともと人口の少ない場所だし、観光客も少ないから、海岸線を車で疾走し続けても、人に会うことがほとんど皆無だった。

この砂の白さのおかげなのか、海の色も、熱帯のトロピカルブルーに引けを取らないくらい青々として美しい。このくらいの緯度の海岸線はどこに行っても、岩礁系、砂もサンゴでできていなくて黒っぽかったりという印象が強いのに、とにかく、ここの風景は、その海中に生息する不可思議な生物同様、物語の中から現実の世界に飛び出してしまったかのような不思議な印象を与えてくれた。

ビーチだけでなく、エスペランスの町の側には、時間帯によってピンク色に染まるピンクレイクという塩湖があったり、海岸から少し内陸に入った場所には、白砂の大砂丘、ワイリーベイ砂丘があったりと、陸地の景観も堪能できる。大砂丘では、サンドボーディングができるほどの急な傾斜もあり、一度やると結構童心にかえってしまって、何度もチャレンジしてみたくなった。

#02 エスペランス・竜の住む海 Esperance

極めつけは、新鮮な魚介類を楽しめる

エスペランスでのダイビングトリップを開催している、パースにある日本人ダイビングサービス、WATDCでは、ここでのダイビングのオプションとして、現地に豊富に生息しているアワビやロブスター、それに時には世界で一番重いカニなど、豊潤な海の幸をダイビング中に食べさせてくれる。ダイビング中というのは、まさに言葉の通りで、ダイビングボート乗船中に、ガイドが巨大な布袋一杯にアワビやロブスターを捕まえてきて、船上で刺身にして食べたり、バーベキューにして食べたりできるのだ。

この海域で多く取れるアワビは、グリーンリップスと言って、見た目は緑色をしていてグロテスクに見えるけど、味は最高だ。しかもこの高級食材を「もう見たくもない」と思えるくらい腹一杯に食べることができる。とにかく、取り放題なのだ。観光客でも、郵便局でお金を支払い、簡単に漁業権を買う事ができるというから、驚きだ。もちろん、ガイドが漁業権を持っているので、彼らと一緒にいれば、希望があれば自分で食べるアワビを、自ら採取することも可能なのだ。

極めつけは、レモンジンジャーで炒めたアワビを、バターをたっぷり塗ったパンに挟んで食べるアワビステーキサンドイッチ！アワビから肉汁がしたたり落ちるジューシーさ、なぜだかパンやバターとの相性もばっちりで、次のダイビングはスキップしてずっと食べ続けたくなってしまった程、僕の食欲を刺激してくれた。ダイビングだけでなく、こんなグルメな海の魅力を堪能できるところが、エスペランスの最大の魅力でもある。

海の冷たさ、遠さだけを省けば、リーフィーやウィーディー、ゴブリンフィッシュなどなど、変わった生物層に会えるし、アシカなどの大物海洋ほ乳類との海中での遭遇チャンスもあり、ビーチの美しさ、変わった景観、それにおいしい海の幸三昧というエスペランスは、僕自身にとって、5本の指に入るくらい、是非、是非またリピートしたい海の一つになっている。

砂丘でボディーボーディングが楽しめる現地のオプショナルツアーもある

真っ白な砂丘、ワイリーベイ砂丘の景色も壮観だ

ワイルドフラワーのウエディングブッシュは、可憐な白い花を咲かせる（写真上）　グリーンリップスと呼ばれるアワビ！これでも捕ってきたほんの一部に過ぎない（写真右）

Information Link click! 情報HPへジャンプ
http://diveadventures.watravelanddive.com/

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

シャークベイ・ジュゴンサンクチュアリ

#03

Shark Bay

外洋から隔てられたシャークベイの空撮。浅いリーフが点在し、黒い部分はジュゴンの餌となる海草が繁殖しているのがわかる

Information Link click! 情報HPへジャンプ
http://diveadventures.watravelanddive.com/

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

湾最奥部にあるストロマトライトの生息地

赤土の道路の脇で見つけたマツカサトカゲ

シャークベイは、エスペランスとは逆に、パースから西海岸線を約700km北上する。車で約10時間。飛行機なら約1時間30分。車での移動では、西オーストラリアのウエストコーストを延々北上する。途中、ピナクルズなどの奇岩が見られるなど、どこまでも続く広大な大陸を放浪する気分が味わえる。

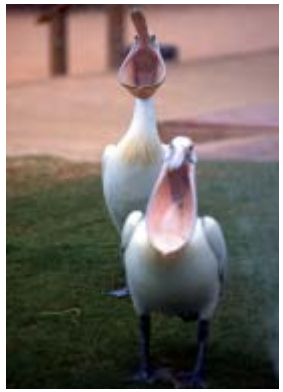
世界自然遺産の海

世界自然遺産にも指定されているシャークベイ。この海で見れるのは、35億年前にすでに地球上に存在していた世界最古の生物、ストロマトライトの広大な生息地や、世界第2位の生息数を誇るジュゴン。ジュゴンは世界中に約8万頭が生息していると推定されているが、その1/8、約1万頭以上がこのシャークベイに生息していると考えられている。広さ13,000㎢に及ぶ広大な内湾は、ダークハートグ島と、イルカが浅いビーチまでやってくる事で有名なモンキーマイアのあるペロン半島によって外用から分断され、約4000㎢、湾内の約1/3という広大なエリアにジュゴンの餌となる海藻が繁殖している。

陸上には、バンディクートなど小型の原始的な有袋類が生息し、さながらこのエリア全体が太古の自然環境を残したまま、外界から隔てられた巨大な古代生物博物館といった印象を受けるだろう。

半島内ではエミューなどの野生動物も多くみられる

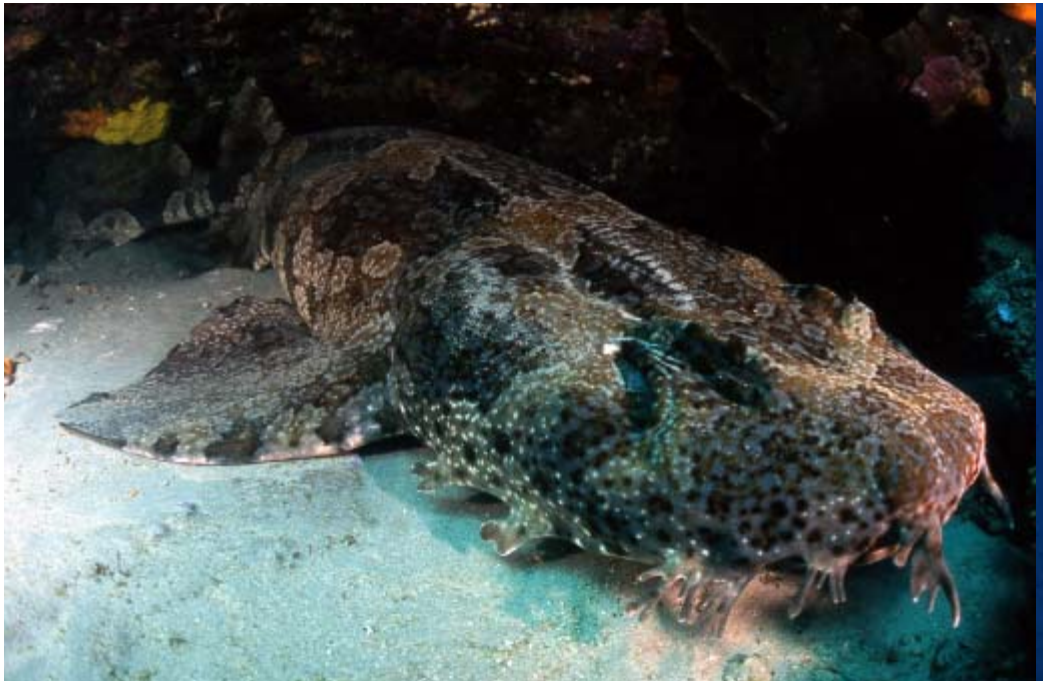
ドルフィンレンジャーに付き従う野生のイルカ。モンキーマイアにて(写真右)
世界遺産と表示された巨大な壁は全て貝の化石からできている(写真中)
モンキーマイアの人気者。スプリンクラーの水を飲みにきたペリカンたち(写真左)



#03 Shark Bay
シャークベイ・ジュゴンサンクチュアリ

Information Link click! 情報HPへジャンプ
http://diveadventures.watravelanddive.com/

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます



スティープポイントでは、海中にじっとしている何匹ものオオセに遭遇した

サーモンフィッシュと呼ばれる巨大な魚の群れにも遭遇

広いケープの中ではブルズアイ（ハタンポの一種）の群れに取り囲まれた（写真上）　体長3.5mにもなるクイーンズランドグルーパーが姿を見せた（写真右上）　アカウミガメの個体数も多く、しかも巨大だ（写真右下）

#03 Shark Bay
シャークベイ・ジュゴンサンクチュアリ

豪快な海での豪快なダイビング

ダイビングでの見物は、オビゴンというオオセの仲間やシャベルノーズと呼ばれていたサカタザメの仲間。それに巨大なクイーンズランドグルーパーなど。発生の時期は一定していないが、アジが大量発生して、大群がダークハートグ島の海岸線を覆い尽くす事がある。フィッシュボールと呼ばれるこの現象、ここには無数のサメやイルカ、クジラなどが集まって補色を繰り返す。海中世界の食物連鎖の極みを見られる衝撃的なシーンだ。今までのデータでは、今年（2005年）か来年（2006年）辺りに発生するのではとの予測が立てられている。数年に一度しか見る事のできない海中で繰り広げられる一大スペクタクルを水中で見るというかなり激しいツアーもWTDCでは企画、開催しているから驚きだ。一度この海中映像を撮影したオーストラリア人カメラマンから見せてもらったが、サメの数は半端ではなく、そのすぐ目の前でミンククジラなどが捕食を行うという半端ない状況で、もし自分がこの中にいたらと想像しただけで、武者震いしてしまった。

いつかこの尋常ならないフィッシュボールの中に身を置いてみたいと、現地からの連絡を今か今かと待っているような状況だ。

Information Link click! 情報HPへジャンプ
http://diveadventures.watravelanddive.com/

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

#03 Shark Bay
シャークベイ・ジュゴンサンクチュアリ

浅い海草の海中で遭遇したジュゴンは、一定の距離を保ちつつ、こちらに興味を示していた

多くの大物生物遭遇などのコーディネートを行っている高島氏（右／撮影・小林龍矢さん）

海面に鼻先を出して呼吸を行うジュゴン

高島 雅之さんプロフィール

西オーストラリアの海を中心に、現在はトンガのザトウクジラ、メルボルンのシロナガスクジラ、ニュージーランドのシャチとの水中遭遇ツアーなど、世界中にフィールドを広げてダイブコーディネートを行う。見かけからは想像もつかない命知らず＆海への情熱に燃えている。ハマる人と、嫌悪感を感じる人と、おそらく両極端なのではと思われる高島氏の奇妙なキャラクター。僕はその奇妙なキャラクター、そして想像を絶する海への情熱に見事にハマった一人でもある。

http://diveadventures.watravelanddive.com/japanese/diveguide_t.html

click! 情報HPへジャンプ

ジュゴンとの遭遇

1万頭以上のジュゴンが生息していると考えられているシャークベイ。ボートで移動していると、呼吸しに上がってくるジュゴンが、あちこちで水面に鼻先を出しているのが見える。「うわ、ジュゴンこんなにいるんだ」というのが、まず最初の印象だった。

セスナで空からも捜索してみたが、海藻の深緑色の上を移動するジュゴンの群れが至るところで確認できた。通常、ジュゴンは単独、あるいは親子などで行動することが多いのだが、海水温が下がる冬から春先の時期。南半球でいう7月～8月頃、ジュゴンたちは、外洋に比べて多少水温の高いシャークベイの内湾に集まってくる。

広大な湾内には、約12種類の海藻が繁殖し、1日に約55kgもの海藻を食べるジュゴンが、1年を通じて餌を確保できる環境があること、また海、陸ともに他のエリアから隔絶され、乾燥した不毛な土地だったために、人間が長い間住めず、乱獲を逃れた事などが、これほどのサンクチャリを形成することになった原因と考えられている。

この海域のジュゴンは、西オーストラリア州政府の組織、CALM(Conservation And Land Management)の保護下にあり、許可が無い限り、海中でジュゴンと遭遇する事は禁じられている。しかしWTDCでは、厳しい規制の中、同組織からの正式な許可を受けて、一度に2名までという入水制限をもうけ、ジュゴンを水中で見るツアーを行っている。水中と行っても、スノーケルだけで、タンクはつけられない。ただ、この海域は水深も数メートルと浅いので問題はなかった。

まずは、水面にぷかぷか浮かびながら、ゆっくりジュゴンに接近していく。ジュゴンの方は警戒心も強いが好奇心も旺盛なようで、ある距離まで接近すると、その距離を保ちつつ、僕の周囲を旋回するように様子を伺っていた。こちらが進むと向こうが同じ距離だけ引き、こちらが引くと向こうが同じ距離だけ前進してくる。しかも1頭でなく、数頭が同じ行動を取るのだ。とにかく、完全に逃げる事はなく常に微妙な距離を保ちながら、数頭がこちらの様子を伺っているのが面白かった。

しばらくは警戒させないように水面で浮いていると、向こうも警戒心よりも好奇心が勝っているのか、徐々にその距離をつめてくる。撮影には十分かなと思ったところで、静かに水中に潜ってみる。すると「きゃ～！」と言わんばかりに逃げて行く。しかし、僕が水面に戻ると、また少しずつ距離をつめてくるのだ。このタイミングが難しいのだが、とにかくこんな行動をお互いに何度も何度も繰り返しながら撮影していた。端から見れば、かなり滑稽な追いかけっこに見えた事だろう。自分でも「なんかバカらしいな～。でも楽しいな～」とマスクの中で半笑いしながら、ジュゴンとのこんなおかしな駆け引きを繰り返していた。

西オーストラリアには、この他、まだまだ特殊な生物の見れる海が点在している。また次号、別のディスティネーションを皆さんにご紹介したいと思っている。

Information Link click! 情報HPへジャンプ
http://diveadventures.watravelanddive.com/

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます